

教育研究

看護学生が学んだ妊婦像

—疑似妊婦体験学習と母性看護学実習を通して—

片倉 裕子・小堀 ゆかり

(2017年12月5日受稿)

抄録： 本研究の目的は、看護学生が学んだ身体的側面、精神的側面、社会的側面、総合的な妊婦像の理解について明らかにすることである。A大学看護学科3年次の大学生男女82名に疑似妊婦体験学習後と進級した4年次女子大学生10名に母性看護学実習後の自由記載内容をデータとし質的記述的に分析した。本研究は所属大学の倫理審査委員会で承認を得た。疑似妊婦体験学習後の身体的側面で【体を感じる重みと危険】、精神的側面で【自然に生まれる気持ち】【心が動かない】、社会的側面で【妊婦から映る自分の姿】、総合的な妊婦像で【疑似妊婦体験ならではの变化】が抽出された。母性看護学実習後の身体的側面で【妊娠期の身体的特性の違いを知る】、精神的側面で【妊娠により起こる喜びと不安】、社会的側面で【妊婦を支える資源を知る】、総合的な妊婦像で【妊婦からの学びの深まり】が抽出された。疑似妊婦体験は、知性、感性、想像性を刺激して、思いもよらない妊婦の想像ができ有効であるが、感情に影響を与えないこともあった。また、母性看護学実習後は、抽象から具体へと学習のプロセスを踏み、総合的に学ぶことが明確となった。

キーワード：疑似妊婦体験学習、母性看護学実習、妊婦、看護学生

I. 緒言

現代社会では、核家族化、晩婚化、女性の未婚率の増加、初婚年齢の上昇など、女性のライフサイクルの変化から出生率の減少に影響があり、看護学生（以下、学生）が妊婦に接する機会が殆んどないことが現状である。21世紀の母子保健の方向性を示す「健やか親子21」で、妊娠・出産に関する安全性と快適さの確保と不妊への支援が取組みとして明記されている。生殖医療技術の進歩によりそれを希望する女性はいるが、利益だけではなく精神的な負担があることも予測される。また、胎児の出生前診断が実施でき、異常が発見された場合に起こる問題が議論されている。このように女性の置かれている環境の変化に伴い、看護に従事する者による妊娠期の理解は不可欠である。学生は、母性看護学の講義で妊娠期の看護に

ついて学習をするが、妊婦のイメージをもつことができず妊娠期の理解が深まらないことが多い。そのため先行研究では、疑似妊婦体験学習をすることで学習効果が期待できるとの報告がある^{1)~6)}。学生が母性看護学の講義で妊娠期の看護について学び、その理解を深めるために疑似妊婦体験学習をすることで妊婦のイメージができ、身体的側面、精神的側面、社会的側面から考えることで多様な疑似体験となることを実感している。体験学習をすることで情動を伴い心を動かすことで教育効果があり学習が深められる。逆に知識のみに重点をおき体験学習をしない場合、期待する妊婦理解の効果を得られにくいことがあり、身近に妊婦と接することが少ない学生が、疑似体験によって身をもって知ること、感じることで理解の深さにつながると考える。その体験を踏まえ、母性看

護学実習をすることで妊婦理解がさらに深まることが期待できる。学生が妊婦理解を深めることにより、妊娠期の看護だけでなく、妊娠期から影響がある身体的側面、精神的側面、社会的側面の分娩期、産褥期、新生児期の看護を連動して学習することができる。しかし、擬似妊婦体験学習での効果と母性看護学実習後の妊婦理解を検討した研究は少ない。学生が、妊婦を理解するためにどのような学習が効果的であるかを研究することが必要であると考えられる。

本研究の目的は、擬似妊婦体験学習と母性看護学実習での学びから、看護学生が身体的側面、精神的側面、社会的側面、さらに総合的な妊婦像について、どのように理解したかを明らかにすることである。妊娠期をより深く学習するために擬似妊婦体験学習と母性看護学実習後に学んだ妊婦の理解について検討することで妊娠期の学習内容を構築し、今後学生の指導をするための教育の基礎資料となると考える。

II. 研究方法

1. 研究期間

平成23年4月～平成24年5月

2. 研究対象者

- 1) A大学看護学科3年生，女性71名，男性11名
- 2) A大学看護学科4年生，女性10名

(1)のA大学看護学科3年生が進級し、研究協力を得られた4年生)

3. データ収集方法

1) A大学看護学科3年生に母性看護学の講義で妊娠期の身体的特性を1講(90分)、妊娠期の心理・社会特性を1講(90分)終了後、一人10分程度妊婦体験ジャケット(株式会社高研社製の妊婦体験ジャケットII型、LM-065、総重量7.2kg)を着用して疑似妊婦体験を実施した。その後質問紙で身体的側面・精神的側面・社会的側面、さらに総合的にとらえた妊婦像についての自由記載内容をデータとして収集した。

2) A大学看護学科4年生に母性看護学実習後、質

問紙で身体的側面・精神的側面・社会的側面、さらに総合的にとらえた妊婦像についての自由記載内容をデータとして収集した。

4. 分析方法

擬似妊婦体験学習後の質問紙で身体的側面・精神的側面・社会的側面、さらに総合的にとらえた妊婦像についての自由記載内容のデータと母性看護学実習後の質問紙で身体的側面・精神的側面・社会的側面、さらに総合的にとらえた妊婦像についての自由記載内容をデータとして要約し、意味、内容の類似性、相違性の比較検討をしてコード化し、整理して要約毎に分類、データと対比しつつカテゴリー化した。そして、データと対比しつつカテゴリー化して帰納的に分析をした。尚、分析の全過程において繰り返し共著者間で討議を重ね、信頼性と妥当性の確保に努めた。

5. 倫理的配慮

研究の趣旨、方法は文書と口頭で説明し、特に重量のある妊婦ジャケット着用のため、身体的負担についての説明した上で承諾を得た。また、研究協力は自由意思で途中撤回の自由を保証し、成績には一切関係がないこと、個人情報とプライバシーの保護、データの取り扱いや学会発表では匿名性について倫理的に配慮することを文書と口頭で説明し、同意書に署名が得られた者を研究対象者とした。質問紙は無記名としてデータは番号で識別した。本研究は、北海道文教大学人間科学部教育と研究に関する倫理審査委員会の承認(受認番号第25002号)を得た。

6. 用語の定義

1) 擬似妊婦体験学習

母性看護学の妊娠期の講義で妊婦体験ジャケットを着用し妊婦体験をすることである。

2) 母性看護学実習

学生が母子の看護を理解するために行う実習のことである。

3) 妊婦

学生が学んだ身体的側面、精神的側面、社会的側面、さらに総合的にとらえた妊婦である。

4) 看護学生

母性看護学を学び、母性看護学実習を実施した学生である。

Ⅲ. 結果

1. 研究対象者の属性

研究対象者の年齢は、20～21歳、研究協力の同意を得られた女性72名、男性10名の3年次大学生である(表1-1)。さらに、進級した研究対象者の年齢は、22～23歳、研究協力の同意を得られた女性10名で2週間の母性看護学実習を終了している4年次大学生である(表1-2, 表1-3)。母性看護学実習での受け持ち妊婦の週数は、28～41週であった。

2. 3年次疑似妊婦体験学習後のカテゴリ・サブカテゴリ・コード(表2-1)

データ分析の結果、5つのカテゴリ【 】, 8つのサブカテゴリ< >, 26のコード< >が抽出された。身体的側面では、【体を感じる重みと危険】、精神的側面では、【自然に生まれる気持ち】【心が動かない】、社会的側面では、【妊婦から映る自分の姿】、総合的な妊婦像では、【疑似妊婦体験ならではの变化】が確認された。

1) 身体的側面

《肩と腰と足への重み》《お腹に石がある様な圧迫感と疲労感》《膀胱への圧迫感での尿意》《活動の制限と動作の緩慢》《集中できない辛さ》から<身体から溢れでる辛さ>で、《重心が不安定な歩行》《足元が見えない恐怖感》《ヒールのある靴での転倒の危険》《距離感がわからない怖さ》《姿勢が猫背になる》から<姿勢の変化からの危険>で、【体を感じる重みと危険】が抽出された。

2) 精神的側面

《手でお腹をさする》《お腹にいる胎児に生命を実感する》《日常生活で注意した行動》《嬉しく幸せな気持ち》から<親としての愛着>で、《親として責任感》《順調に発育することへの不安》《身体的苦痛からのストレス》から<胎児の発

育への危惧>で、【自然に生まれる気持ち】が抽出された。《気持ちまで感じる事が無い》から<気持ちの変化が無い>で、【心が動かない】が抽出された。

3) 社会的側面

《他人に見られた経験》《電車で席を譲った経験》から<見られている自分>で、《夫(パートナー)や家族の助け》《社会に支えられている妊婦》から<想像での妊婦の姿>で、【妊婦から映る自分の姿】が抽出された。

4) 総合的な妊婦像

《からだに負担のない行動》《心やからだで感じた疑似体験》《母親への感謝の気持ち》《男性の疑似妊婦体験の必要性》から<思いもよらない妊婦を実感する>で、【疑似妊婦体験ならではの变化】が抽出された。

3. 4年次母性看護学実習後のカテゴリ・サブカテゴリ・コード(表2-2)

データ分析の結果、4つのカテゴリ【 】, 7つのサブカテゴリ< >, 27のコード< >が抽出された。身体的側面では、【妊娠期の身体的特性の違いを知る】、精神的側面では、【妊娠により起こる喜びと不安】、社会的側面では、【妊婦を支える資源を知る】、総合的な妊婦像では、【妊婦からの学びの深まり】が確認された。

1) 身体的側面

《個人差のあるマイナートラブル》《歩行時に重いと感じる》《子宮の増大により重心が前方へ移動》《子宮の増大やホルモン変化により腰背部痛が起こる》《膀胱が圧迫されて頻尿になる》から<妊娠期で異なる身体的変化>で、《妊婦健診での異常の発見》《バイタルサイン測定により妊婦を実感》から<看護技術から妊婦を知る>で、【妊娠期の身体的特性の違いを知る】が抽出された。

2) 精神的側面

《胎児の存在と胎動で喜びが増す》《出産後の生活を待ち望む》から<妊娠の喜びと期待>で、《出産に向けての不安》《妊娠分娩歴や身体的変化は気持ちの変化に影響》《初産婦と経産婦の不

安の違い」≪兄弟との関係を危惧」≪日常生活で活動制限がストレスになる」≪妊娠期は出産後を想定しての不安がある」から「妊娠による不安やストレス」で、【妊娠により起こる喜びと不安】が抽出された。

3) 社会的側面

≪家族との関わりが深くなる」≪母親学級での盛んな情報共有」から「社会との接点」で、≪家庭内にいる妊婦も多い」≪初産婦は母親学級の需要が高い」≪実母や義母の強いサポート」≪社会資源の活用の理解に個人差」≪妊婦は法律で守ら

れている」から「家族の理解と協力」で、【妊婦を支える資源を知る】が抽出された。

4) 総合的な妊婦像

≪夫（パートナー）の育児への思いと不安」≪必ずしも起こらないマイナートラブル」≪ストレスはあるが前向きな気持ち」≪妊婦からの身体的・精神的・社会的側面の学び」≪妊婦の背景をみて妊娠期のケアの必要性」から「妊娠での個別性と総理解」で、【妊婦からの学びの深まり】が抽出された。

表1-1 3年次の研究対象者

n=82

研究対象者	人数	年齢
女性	71人	20歳～22歳
男性	11人	

表1-2 4年次の研究対象者

n=10

研究対象者	人数	年齢
女性	10人	21歳～23歳

表2-1 3年次疑似妊婦体験後の身体的・精神的・社会的側面と総合的な妊婦像

n=82

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
1. 身体的側面 【体に感じる重みと危険】	<p><体から溢れでる辛さ></p> <p><姿勢の変化からの危険></p>	<p>≪肩と腰と足への重み></p> <p>≪お腹に石がある様な圧迫感と疲労感></p> <p>≪膀胱への圧迫感での尿意></p> <p>≪活動の制限と動作の緩慢></p> <p>≪集中できない辛さ></p> <p>≪重心が不安定な歩行></p> <p>≪足元が見えない恐怖感></p> <p>≪ヒールのある靴での転倒の危険></p> <p>≪距離感がわからない怖さ></p> <p>≪姿勢が猫背になる></p>
2. 精神的側面 【自然に生まれる気持ち】	<p><親としての愛着></p> <p><胎児の発育への危惧></p>	<p>≪手でお腹をさする></p> <p>≪お腹にいる胎児に生命を実感する></p> <p>≪日常生活で注意した行動></p> <p>≪嬉しく幸せな気持ち></p> <p>≪親として責任感></p> <p>≪順調に発育することへの不安></p> <p>≪身体的苦痛からのストレス></p> <p>≪気持ちまで感じる事が無い></p>
3. 社会的側面 【妊婦から映る自分の姿】	<p><見られている自分></p> <p><想像での妊婦の姿></p>	<p>≪他人に見られた経験></p> <p>≪電車で席を譲った経験></p> <p>≪夫（パートナー）や家族の助け></p> <p>≪社会に支えられている妊婦></p>
4. 総合的な妊婦像 【疑似妊婦体験ならではの变化】	<p><思いもよらない妊婦を実感する></p>	<p>≪体に負担のない行動></p> <p>≪心や体で感じた疑似体験></p> <p>≪母親への感謝の気持ち></p> <p>≪男性の疑似妊婦体験の必要性></p>

表1-3 3年次母性看護学実習配置 (2週間：6施設)

実習月	8月		9月		10月		11月		12月		1月		2月		3月	
学生		夏休み		夏休み			母性	母性	母性	母性	冬休み	冬休み	母性	母性	母性	母性

母性：母性看護学実習，母性看護学実習期間：平成23年10/17（月）～平成24年3/1（木）期間内の2週間

表2-2 4年次母性看護学実習後の身体的・精神的・社会的側面と総合的な妊婦像

n=10

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
1. 身体的側面 【妊娠期の身体的特性の違いを知る】	<妊娠期の異なる身体的変化> <看護技術から妊婦を知る>	<<個人差のあるマイナートラブル>> <<歩行時に重いと感じる>> <<子宮の増大により重心が前方へ移動>> <<子宮の増大やホルモン変化により腰背部痛が起こる>> <<膀胱が圧迫されて頻尿になる>> <<妊婦健診での異常発見>> <<バイタルサイン計測により妊婦を実感>>
2. 精神的側面 【妊娠により起こる喜びと不安】	<妊娠の喜びと期待> <妊娠による不安やストレス>	<<胎児の存在と胎動で喜びが増す>> <<出産後の生活を待ち望む>> <<出産に向けての不安>> <<妊娠分娩歴や身体的変化は気持ちの変化に影響>> <<初産婦と経産婦の不安の違い>> <<兄弟との関係を危惧>> <<日常生活で活動制限がストレスになる>> <<妊娠期は出産後を想定しての不安がある>>
3. 社会的側面 【妊婦を支える資源を知る】	<家族の理解と協力> <社会との接点>	<<家族との関わりが深くなる>> <<実母や義母の強いサポート>> <<母親学級での盛んな情報共有>> <<家庭内にいる妊婦も多い>> <<初産婦は母親学級の需要が高い>> <<社会資源の活用や理解に個人差>> <<妊婦は法律で守られている>>
4. 総合的な妊婦像 【妊婦からの学びの深まり】	<妊娠での個別性と総合理解>	<<夫（パートナー）の育児への思いと不安>> <<必ずしも起こらないマイナートラブル>> <<ストレスはあるが前向きな気持ち>> <<妊婦の背景をみて妊娠期のケアの必要性>> <<妊婦からの身体的・心理的・社会的側面の学び>>

IV. 考 察

1. 擬似妊婦体験学習の効果 (図1-1)

一人10分程度の体験後に身体的側面・精神的側面・社会的側面の項目と自由記載の内容については、学生の妊婦理解の率直な回答だった。日常生活で妊婦と接する機会が少ない学生は、「体験ジャケットを着た位では何も感じないと思ったが、想

像以上に感じる事ができた」、「自然と湧く胎児への気持ちと愛着、本当に子供がいて胎動を感じたらすごいことだ」、「妊婦が社会で経験していることを自身の姿に映して想像している」と述べ、客観的に捉えていた時とは異なり体験によって身をもって感じられることに驚きがあった。身体的側面では、身体から溢れでる辛さ、姿勢の変化か

らの危険について身体に起こる全ての刺激に対する反応があるという結果であった。

身体に感じる重み、頻尿の症状などは想像や見ているだけでは分からない体験からの学習効果があると言える。先行研究での疑似妊婦体験学習の効果がある^{1)~6)}と同じ結果であった。実際に歩行、座位などの時や動作についても体験で唯一妊婦を感じられ、姿勢、距離感、重心からの危険があることを実感することができていた。また、胎動があると胎児を気づかうことによって、日常生活動作の注意の必要性や動作が緩慢になるなど、身体的に感じる刺激だけでなくそこから波及し、想像して考えていることが分かった。松尾⁹⁾は、経験をすることによって既存の知識、スキル、信念の一部が修正されたり、新しい知識、スキル、信念が追加されたりすると指摘している。身体に感じるだけでなく胎児への思いや日常の動作へと学生の知性と感性が刺激されて疑似体験ならではの变化から自身も気づかなかった妊婦を学んでいると考える。精神的側面では、親としての愛着、

胎児の発育の危惧から自然に生まれる気持ちが起こるといった結果だった。短時間の体験でも胎児がいるという気持ちになり手でさすり生命を感じ愛着をもっていることが分かる。

しかし、嬉しい気持ちだけではなく身体的苦痛からのストレスがあり、胎児の発育や親としての責任を感じて胎児を心配する感情も同時に起こっていた。これは、胎児の存在を自覚して気持ちの変化が生じ妊婦の気持ちに近づく感情が生まれていると言える。妊婦を理解する上では、必ずしも正常な経過ではない妊婦がいたり、心理面でも個別性があるので多面的に身体と精神の双方向から感じられることは学習する上でマイナス要因となりにくいと考える。

また、少数意見として「身体的変化は感じたが気持ちまで充分感じられなかった」と精神的側面について感じるできない学生がいることが分かった。これは短時間の着用であり想像的な広がりを感じられないと考えられる。社会的側面では、外出していないため実際場面の体験ではない

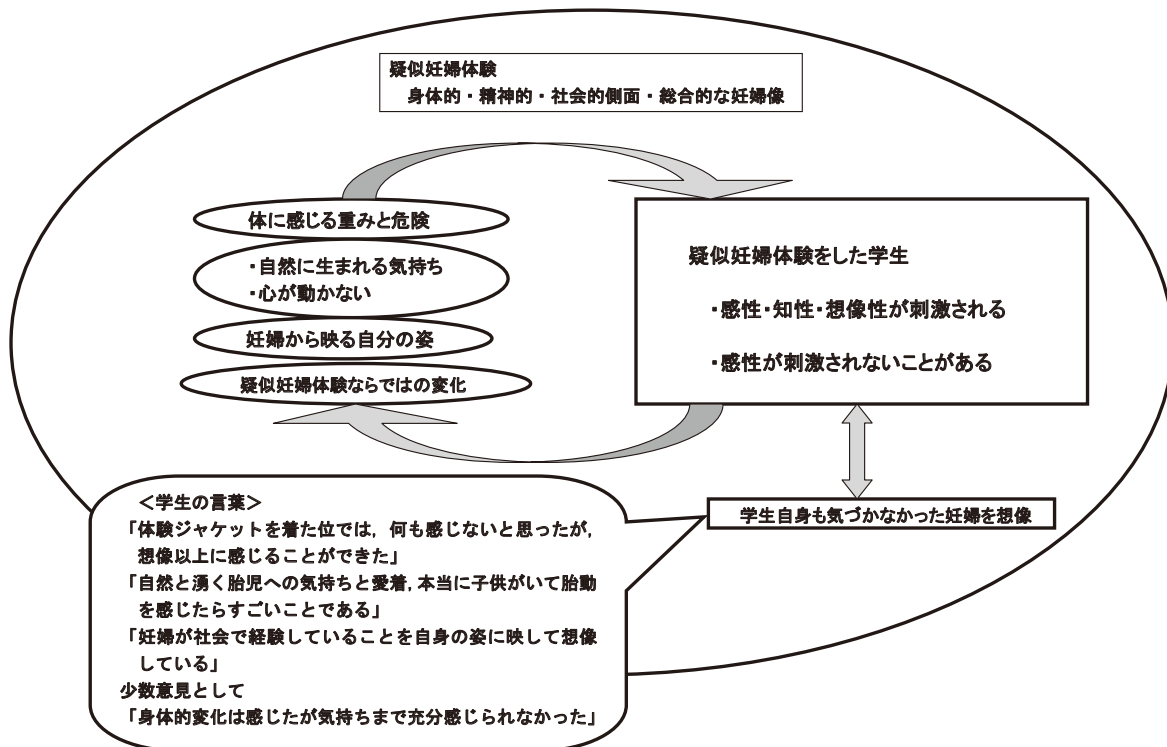


図1-1 3年次での疑似妊婦体験後の身体的・精神的・社会的側面と総合的な妊婦の理解の関連図

が、ボディの変化から周囲の人から見られている自身を意識して妊婦の状態を想像していた。これは妊婦疑似体験による自身の姿から電車などで座席を譲りたい気持ちが芽生え、家族に支えて欲しいという思いが妊婦にあることに気づいたと言える。身体的、精神的側面を考えた上で社会生活上での妊婦を捉えていた。身体的、精神的、社会的側面の相互作用により妊婦への理解を深め、生活体験に基づいて理解を深めていることが分かる。総合的な妊婦像では、学生は妊婦について考える機会は少ないが、妊婦の身体的、精神的側面を学生自身が考えていたより実感し、産んでくれた母親への感謝の気持ちを表現し、さらに、一般男性にも疑似妊婦体験の機会を望んでいた。体験が学生の感性、知性、想像性に働きかけて妊婦を理解し学習が深まることが明らかとなった。成人での学習は、人生の経験が学習資源であると同時に、学習を刺激するものである⁷⁾ことが分かる。

2. 母性看護学実習後の妊婦の理解 (図1-2)

実習で妊娠28～41週の妊婦を受け持ち、初めて妊婦と接した学生が、「初産婦と経産婦では不安が違う」、「バイタルサイン測定を健診で行ない妊婦の異常の早期発見をしていた」、「胎児の存在と胎動で喜びを話す妊婦を知った」、「子宮の増大により重心が前方へ移動、子宮の増大やホルモン変化により腰背部痛が起こることを実感した」、「社会資源の活用についての理解に個人差があることが分かった」と述べ、個別性のある妊婦との関わりを通して理解を深めていた。身体的側面では、妊婦のマイナートラブル（嘔気・嘔吐、便秘、頻尿など）は個別性があること、子宮の増大とホルモンの変動から腰痛が起こっていることや子宮の増大により重心が前方に移動するなどの身体的特性を個別に捉えていた。また、バイタルサイン測定などの看護技術を実践して妊婦健康診査での異常の早期発見をすることで妊婦の身体的変化について学習していることが分かる。看護技術の実践や妊婦自身を通して現実の妊婦と胎児を実感として捉えていることが明らかとなった。精神的側

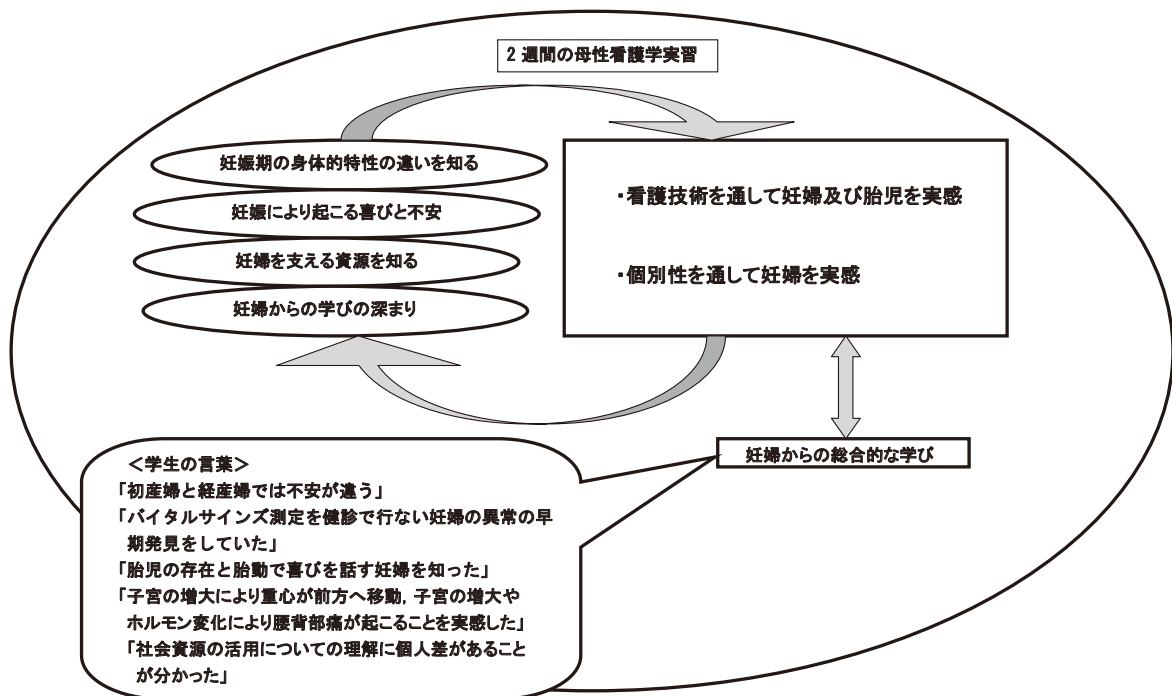


図1-2 4年次での母性看護学実習後の身体的・精神的・社会的側面と総合的な妊婦の理解の関連図

面では、妊娠期の喜びと不安を具体的に両面から学び、さらに、出産後を想定した妊婦の気持ちについても理解を深めていた。また、不安の要因には妊娠分娩歴や初経産、新しい家族を迎えるの兄弟関係についての内容が含まれていた。妊婦の背景を捉えるとともに、日々の生活での気持ちだけではなく出産を含めた総合的な理解へと変化していることから、実習では疑似妊婦体験以上に総合的に妊婦を捉えて、個別性を学ぶ機会となっていることが明確となった。これは妊婦を想像した演習での疑似妊婦体験とは異なり、学生と受け持ち妊婦との相互作用により個別性を重視して妊婦を学習していると言える。社会的側面では、学生は妊婦について家族の理解と協力、社会生活で個人又は法律に支えられていることを学んでいた。それは、実母や義母の強力なサポートを受け家族との関係が深くなること、母親学級で情報共有するが、社会資源の活用や理解に個人差があることなどを捉えて、具体的に妊婦を取り巻く社会を現実のものとして学んでいると言える。総合的な妊婦像では、妊婦の背景を捉えたケアの必要性、ストレスはあるが前向きな気持ちがあること、夫(パートナー)にも育児への思いと不安があることについて学習していた。実習前に疑似妊婦体験後に学生が捉えていた妊婦像と実習後とでは異なる変化がみられたことでさらに理解が深まったと言える。行動が諸経験の結果として変化するプロセスとして学習を捉えることができる⁷⁾。疑似妊婦体験をした時は母親への感謝や男性の体験の必要性などが主であったが、実習後は個別性がある妊婦を理解し抽象から具体へと妊婦と学生の相互作用が起き、総合的に学習していることが明らかとなった。松尾⁹⁾は、個人は具体的な経験をし、その内容を振り返って内省することで、そこから得られた教訓を抽象的な仮説や概念に落とし込み、それを新たな状況に適用すると述べている。身体的・精神的・社会的側面についての妊婦理解が実習によって変化し、その理解が変容することからこのプロセスで学習が進行していると言える。妊

娠期における妊婦を総合的に理解する実習ならではの学びができていることが明確となった。

V. 結 語

本研究では、擬似妊婦体験学習後の身体的側面は【体を感じる重みと危険】、精神的側面は【自然に生まれる気持ち】【心が動かない】、社会的側面は【妊婦から映る自分の姿】、総合的な妊婦像は【疑似妊婦体験ならではの变化】に分類された。また、母性看護学実習後の身体的側面は【妊娠期の身体的特性の違いを知る】、精神的側面は【妊娠により起こる喜びと不安】、社会的側面は【妊婦を支える資源を知る】、総合的な妊婦像は【妊婦からの学びの深まり】に分類された。学生が疑似妊婦体験をすると知性、感性、想像性を刺激されて思いもよらない妊婦を想像ができ、学習が深まったと考えられる。妊婦の身体的・精神的・社会的側面から理解ができる疑似妊婦体験学習は有効であると言える。さらに、母性看護学実習後では看護技術の実践や妊婦自身を通して現実の妊婦と胎児を実感としてとらえていた。個別性がある妊婦を理解し抽象から具体化へと学習のプロセスを踏み、妊婦と学生の相互作用により総合的に学習していることが明らかとなった。

本研究の限界は、疑似妊婦体験による看護学生のデータ数と母性看護学実習を体験した看護学生のデータ数に大きな差があることである。特に、実際の妊婦に接した看護学生数が疑似体験学習の学生数より非常に少ないため、実習体験者のデータ収集を積み重ねることで、実習体験による学びの深さや広がりにより明確になることが期待される。しかし、本研究によって疑似妊婦体験と母性看護学実習をした看護学生の成長の質的違いと変化をある程度捉えることができたと考える。

文 献

- 1) 伊藤良子：妊婦擬似体験学習の課題提示の工夫で得られた看護学生の妊婦理解についての質的分析。京都市立看護短期大学紀要、

- 2006, 31, 1-4.
- 2) 大林陽子：母性看護学における看護学生の疑似妊婦体験の学習効果の検討. 看護教育. 2008, 39, 6-8.
 - 3) 小川久貴子, 山田栄一, 久米美代子：擬似体験学習と産科外来実習で学生が得た妊婦理解の違い. 日本看護学教育学会誌. 2002, 11 (3), 25-33.
 - 4) 小川久貴子：母性看護学講義の疑似妊婦体験学習で得た学生の妊婦理解. 日本ウーマンズヘルス学会誌. 2002, 1, 36-44.
 - 5) 榮玲子, 野口純子, 植村裕子, 他：母性看護学における演習の学習効果. 母性衛生. 2003, 44 (1), 93-97.
 - 6) 笹野京子, 加城貴美子, 高塚麻由, 他：看護学生における妊婦体験学習効果. 新潟県立看護短期大学紀要. 2004, 10, 1-8.
 - 7) 庄司和晃：科学的思考とは何か. 東京, 明治書店, 1996, 13-68.
 - 8) Sharan B. Merrian, Rosemary S. Caffarella. 成人期の学習 理論と実践. 立田慶裕, 三輪建二編：第11章学習についての鍵となる理論. 東京, 鳳書房, 2005, 293-314.
 - 9) 松尾睦：経験からの学習・プロフェッショナルへの成長のプロセス. 東京, 同文館出版, 2007, 62.
 - 10) 赤尾勝己：生涯理論を学ぶ人のために—欧米の成人教育理論 生涯学習の理論と方法. 東京, 世界思想社, 2010, 141-169.

Pregnant Woman Studied by Nursing Students

KATAKURA Yuko and KOHEI Yukari

Abstract: This study identified nursing students' understanding of pregnant women after participating in a pregnancy simulation exercise and maternity nursing training. The study participants were 82 third-year students (male and female) who completed pregnancy simulation, and 10 fourth-year students (female) who completed maternity nursing training. A qualitative and inductive approach was employed to analyze data investigating physical, psychological, and social aspects of learning, and free answers. The study was approved by the research ethics committee at our affiliation. The following items were extracted as representing students' learning after the pregnancy simulation: "all kinds of body stimuli" (physical aspect), "naturally occurring feelings" (psychological aspect), "seeing myself from the perspective of a pregnant woman" (social aspect), and "changes made possible by, and only in, the simulation" (overall image of pregnant women). The following items were extracted in relation to students' learning after maternity nursing training: "learning about differences in physical features during pregnancy" (physical aspect), "feelings of joy and anxiety associated with pregnancy" (psychological aspect), "learning about support and resources available to pregnant women" (social aspect), and "an enhanced understanding of what was learned about pregnant women" (overall image of pregnant women). Experiential learning through simulation was effective as it stimulated students' intellect, sensitivity, and imagination, enabling them to develop an otherwise unattainable understanding of pregnant women. Furthermore, through the maternity nursing training experience, students developed a realistic perception of pregnant women and unborn children, reflecting hands-on experience with nursing techniques and interaction with pregnant women. The findings showed an abstract-to-concrete process for comprehensive learning.

Keywords: pregnancy simulation (simulated pregnancy experience), maternity nursing training, understanding regarding pregnant women, nursing students'